

「思えば遠くへ来たもんだ。」

松永哲夫

東北文化学園大学の松永です。皆さんお元気ですか。退職してから17年経過し、昔のことを思い出しながら、思うまま書いてみました。

私は、昭和49年4月、日本国土開発に入社しました。入社当時を振り返ると昭和48年オイルショックを機に日本経済が狂い始め、その翌年に我々が入社した訳であります。

それまで新入社員が受けていた富士山麓での自衛隊での新人研修が中止になり、厚木の工業団地の一角に現場の仮囲いをされた、現場事務所が5棟立ち並んだ、なかば監禁状態の研修が2ヶ月間実施された訳であります。本社が赤坂にある会社なので、研修会もすごい施設で行われると思っていた夢は、ものの見事に打ち砕かれた感がありました。

後に聞いた話では、「200名近く入社した我々を一人でも多くやめさせること。」が課題で、少しでも会社として新人を減らし、スリムにしようと考えた結果だそうです。当時の受注が極端に減少したことを考えると、やむを得ないことだとは思いますが、当時の新入社員は殆ど辞めなかったようで、厳しい時代に生きていたなど、感心する次第であります。

配属は本社の設計部で構造設計を5年間行い、昭和54年8月下旬に山形県天童市に長崎屋建設(当時17億)のため、品質管理という名目で東北の地に生まれて初めて足を踏み入れた次第です。出身が九州熊本(八代)でありましたので、当時の寒さが身に堪えた記憶が蘇ります。

ひと現場の予定が会社を退職する平成8年までの18年に及ぶわけではありますが、大にしてよく聞く話だと思います。

同期は仙台支店関係では、吉村元営業部長や國分元事務部長などがいます。

私が仙台支店に残ることになったのは、昭和55年名掛丁にある、当時田崎真珠が入っていた庄司ビルで、JV先の会社が倒産し、国土が一社で受けることになり、人員が不足していたことと、地下を持つ7階建ての複雑な構造とエキスパンションが設置された物件で、構造に強い私が適任であったと、後に聞いたことがありました。

市内の初めての現場は狭くゴミなど片付けまで職員が行っており、当時の所長であった工藤陽三さんと石川要二元主任、高野さんと私の4名で現場経験のない私にとって監督の仕事は大変だったと記憶しております。朝4時の出勤もしばしばで、労働基準監督署の指摘を受けるようなことをしており、今思えば無茶をしていたような気がします。

平成に入る頃、バブル時代の真っ只中、入社2～3年目の小野君と関君言う当時新入社員と、派遣の工藤さんと4名で当時15億くらいの仕事をしており、会社もイケイケの時であったので、ある意味大変な時代でした。

その後、現在の大学がある国見の地で東北文化学園の仕事が始まる訳ではありますが、元理事長との出会いは昭和56年、当時本町にあった東北文化学園専門学校の工事からであり

ます。中里元建築部長が所長で石川要二元主任と3名で、近隣に注意を払い狭い現場をよくやったと思います。名掛丁の現場は営業が三浦元営業部長、文化学園は鈴木元営業部長でした。

現在の私の業務は、東北文化学園大学の学生募集と就職支援の両方を任されており、皆様のご息やお孫さんで大学や専門学校に入学希望の方がおられましたら、是非ご紹介下さい。また、日本国土開発様への就職などもお世話になろうかと思っておりますので、今後共宜しくお願い申し上げます。

振り返れば、日本国土開発に22年、東北文化学園大学で17年東北の地で34年、歌手の武田鉄矢さんの歌にあるように「思えば遠くへ来たもんだ。」という感があります。

あと2～3年仕事を続けますが、時節柄皆様もご自愛ください。